

NEWSLETTER #100

JASPM NEWS LETTER 創刊 100 号記念特集

- p. 1 創刊 100 号記念エッセイ……………三井徹
- p. 2 『JASPM ニュースレター』100 号を祝す……………細川周平
- p. 3 ポピュラー音楽研究——マージナルな場であるがゆえのアドバンテージ……………小川博司

地区例会報告

- p. 4 2013 年第 1 回中部例会報告……………社河内友里・松平勇二・遠藤健太
- p. 6 2014 年第 1 回関西例会報告……………高橋弘樹

成城大学グローバル研究センター公開シンポジウム報告

- p. 7 「日本のポピュラー音楽をどうとらえる 3-文化装置としての東アジア-」……………田口裕介

JASPM 第 26 回大会告知

- p. 10 第 26 回 JASPM 年次大会の開催と発表募集について

information

- p. 11 会員の OUTPUT
- p. 11 事務局より

JASPM NEWS LETTER 創刊 100 号記念特集

創刊 100 号記念エッセイ

三井 徹

創刊 100 号記念エッセイ執筆のご依頼を頂いて直ぐに思い出したのは「創刊 50 年記念エッセイ」で、それが 13 年も前であったことに気がついた。

その 2001 年には、1 月初旬から 2 ヶ月間、スロヴェニアからの研究者を金沢大学の自分の研究室で受け入れている。その人類学者のライコ・ミュルシク氏が、実はつい先日（5 月下旬）、金沢に遊びに来てくれて、あれが 2001 年だったことを思い出させてくれた。そして、日本学術振興会が申請を受理したミュルシク氏の題目は、金沢におけるライブハウスの実態調査だった。

その題目に必ずしも驚かなかったのは、外国の研究者が日本のポピュラー音楽を研究対象にすることは珍しくなくなってきており、すでに 1995 年の時点で、英国のある研究誌に、いくつか例を挙げながら、その手の人たちは増加していくに違いないと自分で書いている。

単行本のみを挙げると、過去に遡るのはさて置いて、日本のジャズの研究（2001 年）、演歌の研究（2002 年）、戦後日本ジャズ文化の研究（2005 年）、日本ヒップ・ホップの研究（2006 年）、東京ハードコア・シーンの研究（2008 年）、新たな宝塚歌劇研究（2008 年）、日本 PM の総括的研究（2009 年）、日本レゲエの研究（2010 年）、戦後日本 PM の地政学史（2012 年）と続いている。

2 点を除いては JASPM 機関誌では書評されていないので、個々に挙げたが、一方、日本人自身による日

本PM研究が2001年以降おおいに興隆していることはもちろんで、これも単行本に限ると、機関誌で書評されたもの、されていないものの数は、間違いがなければ29点に及ぶ。さらに、日本人による、日本PMではない外国のPMについての単行本は5点、外国人によるPM研究の訳書は3点という具合で、JASPM会員の数からすると、これはたぶん目を見張る盛況かと思う。

「創刊50号記念エッセイ」では、「1990年初頭から現在に至る世界のPM研究の勢いは、それ以前の年月を知る者にはかなり圧倒的で、隔世の感があります」と世界の状況に触れつつ、JASPM会員の皆さんに「英語圏で続々と刊行されるPM研究単行本の傾向などを見据えながら、日本PM研究をさらに飛躍させて下さることを切に願っています」と結んでいた。

現状は、「英語圏の傾向などを見据えながら」など余計なお世話という勢いであり、日本のPM研究がここまで進展してきたことを頼もしく思っています。

(三井徹)

『JASPM ニュースレター』100号を祝す 細川 周平

『JASPM ニュースレター』が100号に達した。もうすぐ開催される大会は第26回、四半世紀が経過したことになる。学会の立ち上げと本紙創刊に関わった者として感無量だ。

古老としてぼくの方から学会の前史を述べておくと、1983年にイタリアのレッジョ・エミリアで国際ポピュラー音楽学会なる団体の第二回大会に顔を出したことに始まる。そこから1時間ほどのボローニャ大学に留学中で、仲間の誘いを受けて出かけた。ポピュラー音楽は演奏や娯楽や評論の対象ではあっても学問の対象になるのか、好奇心を持った。「ポピュラー音楽とは何か」というのが大会のタイトルで、その報告書(*Popular Music Perspectives 2*)を久しぶりに開いてみると、クリス・カトラー、フィリップ・ターグ、リチャード・ミドルトン、イアン・チェンバーズらが参加していた。創世記の大家たちで、その後彼らの著作にはいろいろと感化を受けた。唯一のアジア人としてたくさんの人と話せ、日本支部設立を促され

た。翌年末に帰国し、翻訳を通して名前を知っていた三井徹さんと連絡し、まだお城にあった金沢大学のキャンパスで初めて会い、協力を願った。彼もまた英米の研究者を通じて学会創設から動きを追っていて、中村とうようさん、小川博司さん、橋爪大三郎さんら知り合いに声をかけましようとなり、1986年に支部結成の集まりを持った。その後、支部ではなく国内組織を並行して立ち上げるべきであるとの声が高まり、1988年本学会が生まれた。

『じゃすぶむ通信』(現在の『JASPM ニュースレター』の前身であり、国際学会の支部として出発し、1989年に組織替えした)、これは1987年、まだ博士学生だった東京芸大楽理科の通称0室、事務室で編集印刷が行われた。ワープロが普及した時期で、ファイルを決まったフォーマットに流し込み、読みやすい体裁に整えるのを、ポピュラー音楽関連の本や記事を編集していた会員の柴俊一さん、島原裕司さんが手伝ってくれたと記憶している。タイトル・ロゴは柴君の作ではなかったか。最後のページが白っぽく余ってしまったので、しかたなく「のるか、そるか」と茶々を入れた。勤務時間後に事務室のコピー機を使って、何十枚かづつ両面刷って折って封筒に入れる作業を数時間かけて行った。最初の数号はそうやって作られた。あいにく手元に保存されていないのだが、ポピュラー音楽が研究対象として新鮮だった時期の思い出だ。

今ではヒットもジャケットもアイドルもライブハウスもフェスティバルも、それ自体が人目を引くことはなくなった。1980年代には存在したアートやフォークと対決して我らポピュラー党を掲げる図式はもう意味がない。大衆文化、風俗全般何でも研究対象として認められ、面白がられる時代となった。本学会の会員数の増大はそれを端的に物語っている。しかしこのおめでたい拡大と同時に、人文学全般に大学のポスト減、その結果生まれるオーバードクターが問題となっている。20数年前よりも質の高い仕事をしながら、生活の安定を得られない会員を見るにつけ、先に生まれて(早く年取って)よかったと思う。お祝いの言葉がしんみりなる前に止めておこう。

(細川周平)

ポピュラー音楽研究—マージナルな場であるがゆえのアドバンテージ

小川 博司

服装は全般にカジュアルで、好みのアーティストのTシャツを着ている人もいる。昼間はポピュラー音楽について熱心に議論し、夜は連日、ライブ、パーティーがある。こんな日が5日間続き、フェアウェルパーティーでは2年後の再会を誓う。1990年代の国際ポピュラー音楽学会（IASPM）大会では、参加者の表情は生き生きとして嬉しそうだった。IASPMは伝統的な音楽学や社会学の学会や職場ではメインストリームになれない研究者たちが、水を得た魚のようになることができる場だった。IASPMはマージナルな場であるがゆえに活気があった。

1989年7月、私は初めてIASPM大会に参加した。アントワヌ・エニヨンがホストを務めたパリ大会である。この年の11月JASPMの設立準備会が開かれ、翌1990年にはJASPMが正式に発足した。同年ポピュラー音楽研究最初の本格的教科書と言えるリチャード・ミドルトンの *Studying Popular Music* が出版された。翌1991年東西を隔てていた壁の崩れた旧東ベルリンで、ピーター・ヴィッケがホストを務める大会が開かれた。今、振り返れば、ベルリンはポピュラー音楽研究の本格的な始動を宣言するに相応しい場所だった。

IASPM大会は、その後、ポール・フリードランダーがホストを務めた1993年カリフォルニア大会、サイモン・フリスの1995年グラスゴー大会を経て、1997年には三井徹先生を実行委員長に金沢で大会が開かれた。この頃までは、IASPM大会にはマージナルな場であるがゆえの快樂があり、JASPMとIASPMもうまく絡み合っていた。日本からのIASPM参加者も少なからずいた。

ポピュラー音楽研究は、21世紀に入り内外ともに発展し、かつてに比べれば、自らのよって立つ基盤を確保しつつあるように見える。そうすると、このような学会があることのありがたみも薄れ、学会のマージナルな場であるがゆえの快樂も減じてくる。

しかし、ポピュラー音楽研究の対象は依然として常

に動いており、多様なディシプリンでアプローチすることが求められていることに変わりはない。ミドルトンが先の教科書に書いている、ポピュラー音楽の厳密な定義はできない、音楽のフィールド全体に目配りし、フィールド全体が動いていることを捉えよ、というメッセージは今でも有効である。不動の研究対象が存在する、権威あるポピュラー音楽学などそもそもありえないのである。

そのように考えると、最近の日本の研究動向には少々危惧を覚える。いささか専門に閉じこもりすぎているか。いささか内向きにすぎないか（日本からのIASPM参加者数も減ってきている）。日本のポピュラー音楽シーン自体が内向き志向なのだから仕方ないという見方もあろうが、だからこそ広い目配りが必要なのではないか。もっと雑食（オムニボア）になって、マージナルな場ゆえのアドバンテージを取り戻せないか。

以上、IASPM、JASPMに四半世紀関わってきた者として、この25年を振り返っての感想を書かせていただいた。最後にもう一つ、四半世紀を経ても、あまり変わっていない問題があることに触れておきたい。それは、アカデミズムとジャーナリズム、あるいは研究者と評論家・ライターとの間の交流が必ずしもうまくいっていないということである。一般に研究者はアカデミックな文献とともに評論家・ライターによる作品もカバーするが、逆はあまりない。アカデミズムの側の成果が、社会にうまく還元されているとは言えないのだ。マージナルな研究者ならではの豊かな成果をいかに生みだし、いかに巧みにアピールしていくかが問われている。

（小川博司）

2013 年第 1 回中部例会報告
社河内友里・松平勇二・遠藤健太

2013 年第一回中部地区研究例会

2013年11月3日(日)

於:愛知県立大学・県立芸術大学サテライトキャンパス

報告者:近藤博之

報告者:玉木博章(高等学校非常勤講師(兼任))

報告者:西村秀人(名古屋大学大学院国際開発研究科准教授)

**1.近藤博之「日本レコード界黎明期の唱歌レコード
歌手納所文子とそのレコード」**

納所文子(1896-1964)は、日本レコード黎明期の唱歌レコード歌手であり、「兎と亀」、「桃太郎」等の多くの唱歌を作曲した納所弁次郎の娘である。文子は、アメリカ・コロムビアの出張録音を皮切りに、明治末期から大正初期にかけて数々の唱歌を弁次郎の伴奏で歌い、レコードに残した。同時代には、彼女以外の唱歌歌手によるレコードもあったが、初の国産レコード会社である日米蓄音器(後の日本蓄音器商会)の主要歌手であったことにより、彼女は唱歌レコード歌手の第一人者として扱われるようになった。

しかしながら、先行研究において、納所文子の功績が正確に辿られてきたとは言えない。例えば、日本童謡辞典(2006)の童謡歌手に関する記載からは(1930年代頃から唱歌と童謡の区別は曖昧なものとなったため、文子は童謡歌手と捉えられることもある)、童謡歌手のパイオニアは、本居三姉妹の本居長世であり、文子はあくまで二番煎じの存在であると理解されていることが読み取れる。

このような解釈に対して、近藤氏は、先行研究文献をはじめ、当時の音源、写真、文子の親族へのインタビュー等の資料から、文子が本居三姉妹より10年以上も前から活躍していた歴史的事実を明示し、納所文子の唱歌歌手のパイオニアとしての位置づけを提示した。

さらに近藤氏は、文子のレコードの複写版が無許可で多数出回ったことや、彼女の唱歌レコードには教育的な要素があったにもかかわらず学校教材としては用いられなかったこと、ラジオ出演の際には唱歌だけ

でなく童謡や童謡ジャズ等を歌唱することもあったことなどに言及し、彼女のレコードや演奏活動の特徴を解説した。また、文子と、本居三姉妹やその後の童謡歌手との共通点や相違点についても論じた。近藤氏は、これらの考察から、文子が大正前半期唱歌レコードの代表的歌手であったことを改めて明示した。

会場からは、当時の日本の音楽全体における唱歌や唱歌レコードの位置づけ、出張録音という形式、蓄音器とレコードの普及状況と唱歌の普及の相関関係に関する質問があった。近藤氏からは、明治時代になると日本近代化のために学校教育で唱歌が取り入れられたという歴史的背景や、当時のレコード消費量における唱歌レコード消費量の割合は約10%であったこと、西洋風より和風のレコード(義太夫、浪花節等)の消費が主流であったことが説明された。近藤氏はさらに、出張録音について、アメリカ・コロムビアからレコードを出していた頃は、アメリカで録音したものを日本に持ち帰ってきて販売していた、という経緯を紹介した。最後に、当時の蓄音器の普及率等からも納所文子のレコードを考察し、さらに論を深めたいという今後の展望が示された。

(社河内友里:三重大学)

2.玉木博章(高等学校非常勤講師)

「AKB48の歌詞論に関する考察」

本発表の目的は、小林よしのりと宇野常寛の歌詞解釈に対する批判と、新しい解釈の提示である。発表者の玉木は主に次の2点の書籍を批判の対象とした。

- ① 小林よしのり、中森明夫、宇野常寛、濱野智史(2012)『AKB48 白熱論争』幻冬舎
- ② 宇野常寛(2011)『リトル・ピープルの時代』幻冬舎

発表者は小林よしのりが、AKBの「Beginner」という曲を聴き「これはわしのテーマソング」といったことを例に、「共感のメカニズム」を考察した。玉木は、H. ブルーマーの理論を引用し、「・・・物事の意味は・・・自分が出会った物事に対処する中で、その個人が用いる解釈の過程によって扱われたり、修正されたりする」と説明した。つまり個人によって歌詞の解釈が異なるということである。また、玉木は小川博司、

U. ベックらを引用し、AKB の歌は、「個人化」された社会で、「自己責任」や「圧力」に耐えて生きる現代社会の人々に必要とされる「元氣」であると述べた。

次に玉木が言及したのは、宇野による AKB48 の「内在的アイドル」論である。宇野は「AKB は・・・消費者たちとともにたち、消費者と一緒に豊かに彩っていく（内在的）アイドルなのだ」とのべる。宇野が AKB を「内在的」と評するには 2 つの理由がある。ひとつは AKB の歌詞に見られる一人称の「僕」化である。つまり、女性歌手が男性の一人称を用いて歌い（Cross Gendered Performance）、男性の共感を求めるという点である。もうひとつの理由は「自己言及」である。たとえば「会いたかった、君に」という歌詞は、実際に AKB 劇場を訪れた聴衆に向けられた、歌手自身のメッセージである。歌手自身が「会いたかった」という意味で、宇野はこの歌詞が「自己言及」であると評している。玉木は、この「内在的アイドル」論に対し、歌詞のみを対象にしたその分析に問題があると批判した。

そこで玉木が用いた分析方法は、中高生に対するふたつのアンケートである。一つ目のアンケートは AKB に対する好感と共感に関するものである。この調査の結果、AKB ファンであっても、必ずしも歌詞の内容に共感するわけではないということが明らかになった。二つ目の調査は、共感と性別に関するものである。この調査からは、男性よりも女性のほうが AKB の歌詞に高い確率で共感することが明らかになった。玉木はこれら二つのアンケート調査の結果から、宇野らによる一義的な歌詞解釈と「内在的」アイドル論を否定することができると結論付けた。

発表後、会場からは「宇野常寛の評論を学術的に検討することの妥当性」、「メッセージというよりも、商品として作り出された AKB の歌詞分析の必要性」、「秋葉原の文化としての AKB の歌詞解釈」などについての意見や質問が出た。

(松平勇二:名古屋大学博士研究員)

3. 西村秀人 (名古屋大学大学院国際開発研究科准教授)

「国際コロキウム『昨日と今日のタンゴ』に参加して」

西村氏は、本年 9 月 27 日～30 日にウルグアイの首都モンテビデオで開催された国際コロキウム「タンゴ昨日と今日」に出席して発表をおこなった経験を踏まえて、同コロキウムの概要と自身がおこなった発表の内容について報告した。

ウルグアイの「国立ラウロ・アジェスタラン音楽資料センター」が 2 年に 1 度開催している国際コロキウムの第 3 回となった今回は「タンゴ」をテーマに据えたものであり、ウルグアイ、アルゼンチン、チリ、ブラジル、コロンビア、フィンランド、日本から計 15 名の識者が集ったという。アジアからは唯一の出席者となった西村氏は、「日本におけるタンゴ：ジャパナイズと正統性の間で」と題して、日本におけるタンゴ受容の歴史に関する発表をおこなった。

発表において西村氏が強調したのは、戦前よりタンゴの実践に携わってきた日本人たちが、本場アルゼンチンのダンス/演奏スタイルに正統性を見出し、その再現をめざすという傾向を顕著に示してきたということであった。例えば、戦前に活躍した先駆的なタンゴ・ダンサー目賀田綱美が、社交ダンスのスタイルとは異なる正統派のタンゴ・ダンスを追求するなかで、アルゼンチン・スタイルの演奏にあわせて踊ることの重要性を訴えていたことが指摘された。また、戦前の日本人タンゴ楽団の楽器編成やレパートリー等の分析を通じて、あるいは、戦後の代表的楽団である早川真平とオルケスタ・ティピカ東京等の活動をたどることによって、当時の限られた情報のなかでアルゼンチン・スタイルの演奏を追及してきた日本人演奏家たちの歩みが示された。その他、戦後になって藤沢嵐子(オルケスタ・ティピカ東京の専属歌手)を始めとする本格派タンゴ歌手が現れ、アルゼンチン式のスペイン語で歌って本国でも高く評価されるほどの水準に達していたことにも言及された。そして、1980 年代のブロードウェイにおける「タンゴ・アルゼンチーノ」の大ヒットや、1990 年代以降の「ピアソラ・ブーム」等を経て、アルゼンチン・スタイルのダンス/演奏が世界的に普及するなかで、日本人のダンサー/音楽家の活躍がとりわけ顕著となっている近年の状況に触

れて、西村氏は、こうした状況が生じ得た背景には、戦前から日本に根づいてきたアルゼンチン・スタイルの追及という伝統があったと結んだ。

フロアから多数の質問やコメントが出された。例えば、戦時下の日本におけるタンゴ演奏に対する規制の実態についての質問があった。これに対して西村氏は、タンゴは当時中立国であったアルゼンチンの音楽であると同時に、同盟国ドイツの音楽でもあり、敵国フランスの音楽でもあったため、ジャズのように明確な規制の対象とはなり得なかったという事情があり、現に演奏が許可された事例も少なからずあったと説明した。

本発表は日本のタンゴ受容史に関する包括的な研究の成果であり、貴重な写真等の画像も数多く提示され、実に有益な情報共有の機会となった。

(遠藤健太：名古屋大学大学院)

2014 年第 1 回関西例会報告

高橋弘樹

研究会：「聴覚障がい者にとってのポピュラー音楽」

日時：2014年2月9日(日)16:00～18:00

於：キャンパスプラザ京都6F第2講習室(「京都文教大学」標示あり)

報告者：大川豪(神戸山手大学 卒業生)

報告者：森田雅子(大阪市立聴覚特別支援学校 校長)

司会：長崎励朗(京都文教大学 講師)

第一回関西地区例会は、「聴覚障がい者にとってのポピュラー音楽」と題し、聴覚障がいがありながらポピュラー音楽を愛好する大川豪氏、ならびに大阪市立聴覚特別支援学校の校長を務める森田雅子氏を迎えてキャンパスプラザ京都6F第2講習室にて開催された。両者による、聴覚障がい者にとってのポピュラー音楽文化の受容についての発表を通して、ポピュラー音楽文化における「音」以外の要素を浮かび上がらせることが主な目的である。

発表は大川豪氏により神戸山手大学に提出された卒業論文「パンクロックと耳聴こえない僕」に沿った形で始められ、まず「聴覚障がい」についての基本的な事柄が大川氏より説明された。大川氏には生まれつき「両耳性感音性難聴」という障がいがある。難聴は、

外耳や中耳といった伝音系に障がいがある「伝音性難聴」、聴覚器の内部にあたる内耳かまたは聴覚神経・聴覚中枢の感音系に障がいがある「感音性難聴」、そしてこれらの特徴を併せ持つ「混合性難聴」の大きく3つの種類に分けることができる。空気の振動を聴覚器の内部へ伝達する為の器官である伝音系に障がいがある「伝音性難聴」は、医学的な治療や補聴器による聴覚の改善が期待できるのに対し、「感音性難聴」は医学的な治療が困難であるといわれ、大川氏が該当するのはこの「感音性難聴」である。これは音声の周波数によって聴こえ方が大きく異なる(低い音は比較的聴こえるが、高い音の聴力が極端に低い、等)為、補聴器による聴力の改善には限界がある。大川氏も補聴器を用いることで少しだけ音を認識することができているが、音、特に言葉をはっきりと聞き取るとは難しいと言う。また補聴器を用いなければ全くの無音の世界、となるそうだ。その為日常生活や他者とのコミュニケーションに際して困難を感じる場面も多いという。

続いて、大川氏と音楽とのかかわり、特に聴覚に障がいがある大川氏がパンクロックを愛好するようになった経緯が語られた。大川氏は小学生から高校生まで聴覚支援学校に通っていたが、そこでは音楽の授業が行われており、大川氏も歌唱、器楽、ダンスやリズムの練習などの実技に取り組んだ。ダンスなど楽しいと思える内容のものもあったが、はっきりと音程を判別することが難しいため器楽の授業などは楽しいとは思えず、この授業を通して音楽を楽しむ、ということに興味を持つようになることはなかったそうだ。

そして高校生の頃、大川氏は自分が周囲から差別的な扱いをされていると感じることや、日常生活における困難などに非常に強いストレスを感じつつ毎日を過ごしていた。何か自分を解放してくれるものを強く求めていた時に、大川氏はパンクロックと出会い、強い衝撃を受ける。「自分のどうしようもない複雑で激しい感情と世の中の歪みに対する悲鳴をパンクロックバンドがどうしようもない自分達の代わりに叫んでくれているような感覚」と大川氏はその時の心情を語る。大川氏が求める音楽とは、この感覚を自分の代わりに表現してくれるものだということであった。

質疑応答の時間が殆ど取れなかったため、大川氏がどのように音楽を聴いているのか、つまり大川氏にとって「音楽」のうち音響情報がどれほど重要なのかを詳しく聞くことはできなかったが、大川氏は音響よりもそれ以外の要素（歌詞、ヴィジュアル、メッセージ性等）に強いこだわりを持っているように感じられた。周囲からの差別的な扱いや、日常生活での困難から障がい者は社会に対しての不満を心の奥に持つことがある、と大川氏は考える。その大川氏は、パンクロックの歌詞やミュージシャンの言動に社会への「反骨精神」を感じ取り、そこに自分の状況を重ね合わせ深く共感するようになった。

これが聴覚障がい者である大川氏が「音楽」に強く心を惹かれるようになった過程である。「ポピュラー音楽文化における「音」以外の要素を浮かび上がらせること」が今研究会の目的の一つであったが、「音楽」が「音響」と切り離されてなお大きな存在意義を持つ場合がある、ということを考えさせられる発表であった。

続いて森田雅子氏より聴覚障がい教育における最近の動向が説明された。音楽に関する取り組みに関しては、やはり動きを伴う活動、和太鼓やボディパーカッションなどには生徒は総じて積極的に取り組むようである。しかし歌唱などは生徒の難聴の程度がそれぞれ異なることもあり、取り組みにはばらつきが見られるようである。全ろうの生徒の中には全く歌わない者もいるが、それは尊重し無理に声を出させたりすることはないそうだ。一方で歌うことが好きな生徒は多くおり、聴覚障がいのある教員にもカラオケ好きであるという方がいるようだ。聴こえなくても字幕に合わせ声を出すのが気持ちいい、楽しい、ということである。ここでも「音響と切り離された音楽の受容」が存在しうることが浮かび上がった。

今研究会ではディスカッションの時間が殆ど取れなかった為、発表についての質疑応答や議論を深めることが十分に出来なかったのが残念であるが、ポピュラー音楽文化において「音響」と「音響以外」の要素それぞれが持つ意味や役割について、考えを深める契機となった。

(高橋弘樹)

成城大学グローバル研究センター 公開シンポジウム大会報告

田口裕介

《日本のポピュラー音楽をどうとらえるか3 —文化装置としての東アジア—》

日時：2014年1月25日(土)

於：成城大学

本シンポジウムは成城大学グローバル研究センターの活動として催されたもので、2012年以來今回で3度目となる。コーディネーターの東谷護氏は、アメリカ発のポピュラー音楽がグローバルスタンダードになりやすいため、ポピュラー音楽について考えることはアメリカナイゼーション的な見方に偏りやすいことを指摘する。そしてその有効性は認めつつ、もともとの地域、具体的には日本と東アジアの関係に着目し、事実としてあるものを見ていくことが今回の開催趣旨であると説明した。

全体は、基調講演、発表、総合討論からなる。

基調講演 歌を聴いて字を識る：日本植民地統治 前後の台湾語流行歌

陳 培豊（台湾中央研究院）

日本の植民地統治下の台湾は、日本語だけでなく、読み方が異なる中国語（北京語）による、二重の文化的支配を受けていた。陳氏はこのことを前提に、当時の台湾流行歌謡曲に目を向け、「歌を聴いて字を識る」という方策について論じた。

陳氏によれば言文一致を目指す中国白話運動は日本統治下の台湾にも伝わるが、閩南語を話す台湾人にとって、北京語である中国白話文の導入はかえって言文不一致となる。そのような中、1930年代台湾知識人によって自らの文体の創出や描写対象を台湾に絞る台湾話文の運動が生じた。

しかし教育や大衆誌の普及していた日本語や、運動のモデルが既にある中国白話文に比べ、台湾話文普及の試みは方法が確立されておらず、挫折する。このような中で台湾知識人は、非識字者の耳に馴染みのある歌謡曲、俗謡の聴覚的記憶を通して文字の画像表記を覚えさせる「逆行操縦」の識字法という方策を打ち立

てたのだという。つまりレコードを聴きながら歌詞を読むのである。

台湾知識人は社会風刺の歌詞を歌謡曲に盛り込むが、社会の低層を描き抗日的であった歌詞は禁止され、またあまり売れなかった。人々の心に残ったのは恋愛を謳う娯楽的なものである。識字手段としての歌謡は、娯楽としての歌謡に惨敗する。それでも台湾話文の文体解釈共同体は成熟していき、30年代後半にはベストセラー小説まで現れた。しかしこれは危険視され台湾話文は禁止されることになったという。

戦後は中国国民党によって、中国白話文が国語となり、台湾話文は方言として排除される。この状況もまた植民地支配であるといえ、このため逆に親日的な態度が生まれ、日本の歌謡曲のカバーも行われたと陳氏は言う。演歌が台湾流行歌の主流となるが、このことは疎外された台湾話文の命綱となる。

その後についても陳氏は触れた。80年代にはカラオケが新たな識字の方法となる。そこでの表記がコンセンサスとなり共通の表記法として認識されるのである。また90年代にはラップが流行するが、この口語体の歌詞には日本語、台湾白話文、台湾話文が混在する。戦後は演歌、「ダサイ」イメージを持っていた台湾話文はおしゃれな文体として認識されるようになった。

陳氏は「歌は世につれ世は歌につれ」という言葉があるが、台湾では「言葉の表記が歌につれ」という状況があると述べて講演をまとめた。

発表1 音楽にみる境界線のポリティクス：博覧会における「植民地」の展示から

葛西 周（東京芸術大学）

葛西氏は、同一地域であっても「音楽」が担う概念は時代によって異なり構築されるものであること、またトインビーを引きながら音楽ジャンルと社会構成層との結びつきをふまえ、日本の「音楽」概念を検討した。明治維新以降、近代化により音楽ジャンルは脱文脈化するが、担われてきたイメージは近代化以降も残存する。これを葛西氏は「物理的乖離と精神的連続」と表現するが、以上の見地から、人や事物が集められ、そのラベリングや価値判断の方法も見物され共有さ

れたといえる様々な「博覧会」を検討した。

1) 万国博覧会 19世紀後半の万国博覧会で日本が出品した楽器の「雅楽／俗楽」という分類は、双方に琴が含まれるため、奏法や形状ではなく、近代以前の文脈に基づいているといえる。俗楽とは雅楽からみた相対的な概念で、ハイアートとポピュラーアートの分類に類似する。この点で相対的音楽概念としてのポピュラー概念は近代化以降の欧米渡来のものではないことも指摘された。また1893年シカゴ万博での国産ヴァイオリンとオルガン、明清楽器の出品や、1889年パリ万博での唱歌教育成果アピールは「日本の」楽器が必ずしも「日本土着のもの」ではないことを示している。

2) 内国博覧会 葛西氏によれば1872年第一回京都博覧会で考案された都をどりのように、博覧会を通じてつくられた地域舞踊、伝統は多数ある。これは当時の府県という新しいローカルコミュニティの同一性を強化する大きな要因となった。

また1907年の婦人博覧会ではお座敷音楽を演奏予定の「芸妓」出演が、「貴婦人」の出演拒否により中止となり、代わりに貴婦人が三味線ではなくヴァイオリンとオルガンで演奏した。ここに音楽や楽器に加え出演者への格付けが公的に示されることが見てとれる。

3) 台湾博覧会 最後に1934年の台湾博覧会の演芸会の催しにおける新作と高砂族（台湾原住民）舞踊を通じて植民地表象についても触れられた。そこでは文化統合過程で推進された「同化」と、植民地を劣位の他者としてまなざし消費する「異化」の双方が展示されたのだという。

発表2 音楽生成の場としての「マダン」：「マダン」から「コリ」へ

水谷清佳（東京成徳大学）

水谷氏は自らのフィールドワークをもとに、韓国で「マダン」と呼ばれる文化実践の場とその変容への考察を行った。

水谷氏によると「マダン」は「庭」のような意味を持つ。しかし1970～80年代大学生らによって「マダン劇」が実践され、80年代の文化政策のなかに「マ

ダン」が取り入れられることで、共同体意識・伝統文化の意味を担う社会的に普及した概念となる。80年代後半ソウル市内の大学路地域に作られた「風流マダン」は若者たちの音楽生成の場でもあり、その後韓国のストリート・ミュージック文化を支える場ともなった。

2005年以降、ソウル文化財団が主催する「清溪川アーティスト」の取り組みにより、ストリート・ミュージシャンに関する認識が変化してきていると水谷氏は言う。これはオーディションを通過したミュージシャンにライセンスを与え、演奏機会と場所を提供する制度である。財団はイギリスのコヴェントガーデンを参考にミュージシャン達をバスカーと呼び、その自立的な活動を目指した。バスカーという呼称は後にミュージシャン達自身にも浸透していく。しかし公的機関の過度な支援と管理は「マダン」らしさの喪失ももたらした。予算不足もありソウル文化財団は終了する。現在はバスカー達自身が「ソウルコリアーティスト」を立ち上げ、活動範囲をソウル市全体へと広げている。また、「コリ」とは「路上」を意味するが、「コリ」つまりストリートでの活動からプロデビューした歌手の登場が、バスカー達に対する認識を憧れの対象へと変えたと言水谷氏は述べる。

かつて「マダン」として展開された場は「コリ」に立ち替わろうとしているという。水谷氏は、バスカー達は自発的な音楽生成の場を作ろうとしているが、これは同時に自発的な管理であり、この意味で文化装置にもなったとも言えることを指摘した。

発表3 村のポピュラー音楽と楽隊：洋楽受容史のグレーゾーン

奥中康人（静岡文化芸術大学）

奥中氏は西洋音楽の理想から無視されやすい音楽に目を向ける事例として「大沢楽隊」をとりあげた。会場では2007年に奥中氏自身が撮影した地域の運動会での演奏が紹介されたが、この楽隊は2005年にCD『疾風怒濤』が発売され、音楽研究者たちの耳目をひいたものである。設立は1925年で現在2代目、3代目のメンバーの管楽器奏者3人と大太鼓、小太鼓の計5人で構成されるが、ボランティアではなく演奏に対

し謝礼を得ている。

奥中氏はまずこの楽隊について音楽史的な観点から論じた。歴史的には、19世紀後半世界各地に欧米軍隊が駐留し、その中の軍楽隊から西洋音楽、ブラスバンドが普及している。日本でも明治期軍楽隊が創設され、これを模倣した民間の音楽隊も生まれる。大沢楽隊もこの流れを汲むのであり、グローバリゼーションのひとつとして位置づけられるのである。

単旋律が揃わない彼らの演奏は西洋音楽の理想からすれば下手であるが、奥中氏はこのずれが非西洋、日本の伝統的音楽では珍しくなく、むしろ少しはずれたところをよしとするヘテロフォニーの音楽に位置づけられると指摘する。伝統的音楽文化を継承しているようで、しかし西洋楽器を用い、とはいえ西洋音楽を志向するわけではない。これを奥中氏は大沢楽隊が「和洋のグレーゾーン」にあると表現した。

大沢楽隊に限らず、このような民間ブラスバンドは昭和30年代まで盛んであったと予想されるが、昭和40年代急激に衰退していく。その大きな原因として、校内放送の普及が挙げられた。レコードは楽隊への謝礼よりずっと安く、繰り返し使用できる。また西洋音楽的価値観が浸透したことも要因として指摘された。

他の非西洋地域のブラスバンドを例に挙げながら、奥中氏はワールドブラスバンドの文脈の中で大沢楽隊をとらえ、ローカルな音楽制作について考える必要性を提起して、発表をまとめた。

総合討論

討論者：高原基彰（関西学院大学）

毛利嘉孝（東京芸術大学）

多岐に渡った内容に対し、高原氏は各論者の論点をまとめつつそれぞれに質問を行った。

外省人／本省人の問題をふまえた見解が求められた陳氏は、異なる両者が、日本の歌謡曲を形は違うがカバーしていることに触れ、その重要性を主張した。

葛西氏は現在の台湾伝統舞踊の担い手たちが自らオリエンタリズムの視点をを用いている側面について問われたが、台湾博覧会の時点で舞踊が舞台上で行われ、土着文化がパフォーマンス化されたことを強調した。

韓国の強い文化政策についての意見が求められた水谷氏は、均質化するK-pop に対し、コリアーティストたちは違う道筋を示しうるとした上で、文化政策に伴う排除の側面は課題であると返答した。

奥中氏は、「渋さ知らズ」のような商業的成功を得た土着ブルスバンドがどう捉えられるか問われたが、コピーされた土着性はむしろ洗練されたモダンな音楽であると述べた。大沢楽隊のメンバーが一人亡くなったことに触れ、仮に他の奏者が真似をして吹きメンバーを補充できても、違和感を伴うだろうという例を挙げた。

毛利氏は広範な全体的内容を、アルチュセールの「国家のイデオロギー装置」、フーコーによる近代国家の「ガバメントリティ」の二つの権力論からまとめて論じた。反抗の契機としての可能性を持つ音楽があったが、今は失われつつあるというやや悲観的な側面と、文化管理技術の中で肯定的に文化生産が行われるが、合意形成とともに強烈的な排除も生じる点を指摘し、文化統治のあり方、東アジアの課題として示した。

(田口裕介：早稲田大学)

JASPM 第 26 回大会告知

第 26 回 JASPM 年次大会の開催と発表募集について

【ご挨拶】大会実行委員長・遠藤薫

2014 年の JASPM 大会は、12 月 6 日(土)と 7 日(日)に、学習院大学目白キャンパスにて開催されます。すでに絶滅危惧種ともいえる山手線駅前に立地するこのキャンパスは、交通至便でありつつ、緑も深く、大正期の大学建築が現在も使われている構内でタヌキやリスと出会うこともあります。近隣には、大正・昭和初期の文化運動が展開された目白文化村、池袋モンパルナス、雑司ヶ谷文士村などの雰囲気を残す教会、宣教師館、モダン住宅などが散在しています。童話童謡雑誌『赤い鳥』を生んだ鈴木三重吉の旧宅は、大学からほんの 2, 3 分の場所です。日本のモダン文化の息吹をいまでも感じることができるでしょう。JASPM 大会も 26 回目となりました。たくさんの皆さまのご参加をお待ちしております。

【発表募集】研究活動担当理事・鈴木慎一郎

本年度の大会での個人発表(12 月 6 日・午後)とワークショップ(12 月 7 日・午前)の募集をいたします。発表申込書(個人発表用とワークショップ用のそれぞれのワードファイルがあります)をダウンロードし、必要事項を記載して、下記メールアドレスまで添付ファイルにて送信してください。(なお郵送等による申込を希望される方は、下記の問い合わせ先までご連絡ください)。受付締切(7 月 14 日)の後に研究活動委員会が申込内容を吟味したうえで、発表についてのお知らせを個別に連絡いたします。

■申込書類

JASPM のウェブサイト (<http://www.jaspm.jp/>) からダウンロードすることができます。

■今大会のプログラムについて

今大会では、第一日(12 月 6 日)午後に個人発表～総会～懇親会、第二日(12 月 7 日)午前にワークショップ、同日の午後にシンポジウム、という順でプログラムを組むことになりました。個人発表をする若手会員が同日後刻の懇親会にて参加者と交流を深められるよう、意図したものです。個人発表とワークショップの申込にあたっては、日程にご留意ください。

■発表時間(予定)について

- ・個人発表：30 分(発表 20 分+質疑応答 10 分)
- ・ワークショップ：3 時間

■大会後に個人発表の要旨を学会ニュースレターに掲載することについて

個人発表を行なう方は、大会終了後に、学会ニュースレター掲載用の発表要旨(1200 字程度)を提出していただきます(2013 年 6 月 16 日開催の理事会での決定)。個人発表の申込をなさる方はご承知おきください。

■ワークショップ企画案について

ワークショップでは、一つのテーマをめぐって多角的に提起される問題について、フロアとパネルの間で

時間をかけて議論することができます。ご自分の研究フィールドの意義を知らしめる絶好の機会ですので、奮ってお申込ください。

パネルは通常、3名ほどの発表者（問題提起者）と1名の討論者から構成されます。申込時に全員の名前を記載することを原則とします。申込時に討論者についてやむを得ず未定であるという場合は、申込採択となれば、人選について研究活動委員会より相談させていただきます。なお非会員も問題提起者や討論者になることができますが、謝礼や交通費は支払われません。

■ 申込締切

個人発表・ワークショップとも、2014年7月14日（月）。7月16日（水）を過ぎても研究活動委員会より受領の連絡がない場合には、下記の問い合わせ先にご連絡ください。

※現在非会員の方は、入会申込をされたのちに発表申込をしてください。入会申込については学会ウェブサイトをご覧ください。

■ 送付先・問い合わせ先

研究活動委員会 鈴木慎一郎

メールアドレス ssdeya_at_kwansei.ac.jp (_at_を
アットマークに変えてご送信ください)

電話 0798-54-4552 / ファクス 0798-51-0955

以 上

会員のOUTPUT

中原ゆかり

『ハワイに響くニッポンの歌』

(人文書院、2014年3月20日)

ISBN: 9784409100332

判型・ページ数：4-6・272ページ

定価：2,800円(税抜)

南田勝也

『オルタナティブロックの社会学』

(花伝社、2014年3月25日)

ISBN: 978-4-7634-0698-9 C0036

判型・ページ数：四六判・並製・256ページ

定価：1,700円(税抜)

鷲尾惟子

『シルクロード・ウイグル族の音楽——その歴史と現在』

(アルテスパブリッシング出版、2014年4月15日)

ISBN: 978-4-903951-85-0 C1073

判型・ページ数：A4判・並製・44ページ

定価：1,500円(税抜)

◆ information ◆

理事会・委員会活動報告

■ 理事会

2014年第1回（持ち回り）理事会

3月13日 議題送付

3月22日 回答締切

議題1 前回理事会議事録案の承認

議題2 新入会員の承認

議題3 2013年第4回理事会での7条退会候補者への
照会結果と退会の承認について

議題4 退会者の承認

事務局より

1. 学会誌バックナンバー無料配布について

現在、JASPM 学会誌『ポピュラー音楽研究』Vol. 1～Vol. 11のバックナンバーは、そのすべての記事が、科学技術振興機構のオンラインサービス、J-STAGEにおきまして無料で公開されております。

(<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jasmpms1997/-char/ja/>)

そのため、事務局に所在する Vol. 11 までの冊子体

のバックナンバーを、希望者の方に無料で配布しております（ただし送料はご負担いただきます）。

在庫については学会ウェブサイトの「刊行物」のコーナーに随時記載しておりますので、配布を希望される方（非学会員の方でも結構です）は事務局にお問い合わせください。また、ネット上で内容が全文公開されていない Vol. 12 以降のバックナンバーについては、引き続き通常の販売を行い、無料配布の対象とはいたしません。ご注意ください。

2. 原稿募集

JASPM ニュースレターは、会員からの自発的な寄稿を中心に構成しています。何らかのかたちで JASPM の活動やポピュラー音楽研究にかかわるものであれば歓迎します。字数の厳密な規定はありませんが、紙面の制約から 1000 字から 3000 字程度が望ましいです。ただし、原稿料はありません。

また、自著論文・著書など、会員の皆さんのアウトプットについてもお知らせ下さい。紙面で随時告知します。こちらはポピュラー音楽研究に限定しません。いずれも編集担当の判断で適当に削ることがありますのであらかじめご承知おきください。

ニュースレターは 86 号（2010 年 11 月発行）より学会ウェブサイト掲載の PDF で年 3 回（2 月、5 月、11 月）の刊行、紙面で年 1 回（8 月）の刊行となっております。住所変更等、会員の動静に関する情報は、紙面で発行される号にのみ掲載され、インターネット上で公開されることはありません。PDF で発行されたニュースレターは JASPM ウェブサイトのニュースレターのページに掲載されています。

(URL : <http://www.jaspm.jp/newsletter.html>)

2013 年より、8 月の紙媒体での発行号については、会員の動静に関する個人情報を削除したものを、他の号と同様に PDF により掲載しております。

次号（101 号）は 2014 年 8 月発行予定です。原稿締切は 2014 年 7 月 20 日とします。また次々号（102 号）は 2014 年 11 月発行予定です。原稿締切は 2014 年 10 月 20 日とします。

2011 年より、ニュースレター編集は事務局から広報担当理事の所轄へと移行しております。投稿原稿

の送り先は JASPM 広報ニュースレター担当 (nl@jaspm.jp) ですので、お間違えなきようご注意ください。ニュースレター編集に関する連絡も上記にお願いいたします。

3. 住所・所属の変更届と退会について

住所や所属、およびメールアドレスに変更があった場合、また退会届は、できるだけ早く学会事務局 (jimu@jaspm.jp) まで郵便または E メールでお知らせください。

現在、各種送付物などはヤマト運輸の「メール便」サービスを利用してお送りしております。このため、郵政公社に転送通知を出されていても、事務局にお届けがなければ住所不明扱いとなります。ご連絡がない場合、学会誌や郵便物がお手元に届かないなどのご迷惑をおかけするおそれがございます。

例会などのお知らせは E メールにて行なっております。メールアドレスの変更についても、速やかなご連絡を事務局までお願いいたします。

JASPM NEWSLETTER 第 100 号

(vol. 26 no.2)

2014 年 6 月 18 日発行

発行：日本ポピュラー音楽学会（JASPM）

会長 細川周平

理事 粟谷佳司・大和田俊之・久野陽一・

鈴木慎一郎・谷口文和・増田聡・

南田勝也・毛利嘉孝・輪島裕介

学会事務局：

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138

大阪市立大学大学院文学研究科 増田聡研究室

jimu@jaspm.jp（事務一般）

nl@jaspm.jp（ニュースレター関係）

<http://www.jaspm.jp>

振替：

00160-3-412057 日本ポピュラー音楽学会

編集：平石貴士